

お茶は人類最初の抽出飲料である。沸騰したお湯と植物の葉からお茶を用意することは、古代からの習慣だ。人々は多様性と刺激を好むため、水を飲むことをより面白くする方法を見つけようとするのである。紀元前2737年、中国の皇帝・神農(しんのう)がこの飲み物を紹介した。('tea'という言葉は中国のアモイ方言に由来する。)中国の文筆家・陸羽(りくう)は、西暦780年に「一千万もの」お茶があると記した。彼は、茶葉は特定の月の晴れた天気の間には摘まれなければならないと述べた。また彼は、お茶にするための葉の加工方法についても記述している。最初に葉を揉み、次に乾燥させ、そして密封するのである。

中国茶は西暦800年に日本に伝来した。お茶がヨーロッパに紹介されたのは、ヨーロッパと極東の間で貿易が始まった1600年代初頭のことである。当時、中国は世界への主要なお茶の供給国であった。多くの言語において、お茶を表す言葉は中国とのつながりを示していた。例えば、トルコ語やポーランド語では、お茶を表す言葉は「チャイ」である。

1834年、インドで茶の栽培が始まり、スリランカ(セイロン)、タイ、そして東南アジアの他の地域へと広がった。今日では、ジャワ、南アフリカ、南アメリカ、そしてコーカサス地方の一部でもお茶が生産されている。

お茶には3つの種類がある。それらは紅茶(発酵茶)、緑茶(不発酵茶)、そしてウーロン茶(半発酵茶)である。緑茶は主に日本と中国で生産されているが、国際的な茶の取引のほとんどは紅茶である。紅茶の製造は主に、晴れた日に若い葉と新芽を摘み取り、約1時間天日干しすることから成る。その後、軽く揉まれて発酵室に放置され、香りや赤い色を発達させる。次に、数回加熱される。最後に、葉は炭火の上のカゴで乾燥させられる。緑茶の葉は蒸気で加熱され、揉まれ、乾燥させられる。ウーロン茶は紅茶と同様に作られるが、発酵時間が短い。

茶の主な3つの品種——中国種、アッサム種、カンボジア種——には、それぞれ明確な特徴がある。中国種は、高さ2.75メートルまで成長する丈夫な植物で、100年生きることができ、寒い冬にも耐える。オレンジペコ茶の原料となるアッサム種は、高さ18メートルまで成長し、約40年生きることができる。カンボジア種の茶の木は、高さ約5メートル近くまで成長する。

お茶は気分を爽快にし、刺激を与える飲み物として世界中で楽しまれている。それはまた、最も古い飲み物でもある。非常に多くの人々が多種多様なお茶を飲み続けているため、お茶はおそらく世界で最も人気のある飲み物としてあり続けるだろう。